

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 25 日現在

機関番号：32680

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00295

研究課題名(和文)「源平盛衰記」の出版と流布に関する研究 日本人の歴史観形成の一階梯

研究課題名(英文) Research on the publication and dissemination of "Genpei Josuiki"

研究代表者

岩城 賢太郎 (IWAGI, Kentaro)

武蔵野大学・文学部・准教授

研究者番号：40442511

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：『源平盛衰記』は近世期においては、『平家物語』以上にひろく流布し、多様なかたちで享受されていたが、中世に遡る伝本(写本)はごく限られ、圧倒的に多数の伝存が確認されるのは、本文の用字がルビ付きの漢字と片仮名であり、句読点を伴った整版本である。この整版本の原典は、近世初期に版行された、いわゆる慶長古活字版であるが、慶長古活字版の漢字にはルビはなく、片仮名の本文には濁点、返り点、句読点等もない。つまり、『源平盛衰記』は近世期以降、整版本によって享受され、日本人の源平合戦観の形成にも多大な影響を与えた。本研究は、整版本の形成過程と流布について、全国各地の伝本の閲覧調査をもとに実証的に検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代最大の国語辞典である『日本国語大辞典』(小学館)は、『源平盛衰記』を初出、或いは特徴的な用例として掲げる語が2600項目以上にのぼる。『源平盛衰記』に難語や稀少語が多く見られることはよく知られているが、その読み(訓)の大半は整版本に依拠し、近世期以降は専ら整版本の本文により享受されて来たが、このことは現今の研究において見逃されている。本研究では『源平盛衰記』が、古活字版と整版とを組み合わせ、近世初期(寛永頃か)の乱版として最初に版行され、ほぼ同時並行的に整版本の本文が整備され流布に至ったことを実証した。また中世の『源平盛衰記』本文を追究する有用な資料が複数、伝存することを確認した。

研究成果の概要(英文)："Genpei Seisuiki" was more widely circulated than "Heike Monogatari" in the early modern period in Japan, and was enjoyed in various forms. However, there are few manuscripts from the Middle Ages, and the overwhelming majority of extant manuscripts are written in kanji and katakana without furigana, and are well-printed with punctuation marks. The original text of this orthopedic version is the so-called Keicho old printing type version, which was printed in the early modern period. However, there are no furigana characters in the Keicho old printing type version, and there are no dakuten or punctuation marks in the main text. In other words, "Genpei Seisuiki" has been enjoyed as a well-printed book, and has had a great influence on the formation of knowledge of the Genpei War among Japanese people. In this study, we browsed and researched manuscripts remaining in various parts of the country, and clarified the formation process and distribution of seihanbon.

研究分野：日本古典文学 中世文学 古典芸能

キーワード：源平盛衰記 平家物語 軍記物語 整版 古活字版 乱版 出版と流布 成篁堂文庫

## 1. 研究開始当初の背景

『源平盛衰記』には、『太平記』や『信長記』等の中世後期の軍記物語の整版本の研究の進展に比して、従来まとまった整版本の研究がなかった。『源平盛衰記』本文に言及する研究は数多あるが、日本古典文学研究分野、及び軍記物語研究分野をはじめ、内閣文庫蔵の慶長古活字版『源平盛衰記』(勉誠社刊の影印本、及び国立公文書館デジタルアーカイブに全巻画像が公開)が参照されている例が大半である。だが、慶長古活字版は、漢字片仮名交無訓の本文であり、難語や稀少語の用例にも訓は無く、漢籍や文書等にもその具体的な訓みは参照者に委ねることになるため、内閣文庫蔵本に数次に亘り書き込まれた、根拠に乏しい訓等もあわせて参照されている感がある。だが、各地に圧倒的多数が伝存する『源平盛衰記』は、漢字片仮名交附訓整版本であり、近世期以降の『源平盛衰記』は、主にこの整版本で読まれ、享受されて来たのである。内閣文庫蔵本に書き込まれた訓等も整版本を検証無く書き入れている箇所が多い。近世期以降の日本における源平合戦観は、『源平盛衰記』の本文により、また『源平盛衰記』の享受・影響を受けた各種資料により形成されていた部分は大きく、『源平盛衰記』整版本、即ち流布本の本文、及びその本文形成についての体系的な研究が必要とされる所以である。

## 2. 研究の目的

本研究「『源平盛衰記』の出版と流布に関する研究 日本人の歴史観形成の一階梯」は、近世期を通して、通史として源平合戦期を俯瞰する軍書として最も重視され、且つ全国的に広く流通し、明治初期に至るまで摺刷を重ねていた『源平盛衰記』整版本の成立過程を解明し、その様々な流布の様相を追究することを目的とする。なお、本課題研究の調査を遂行する上で、石川武美記念図書館成篁堂文庫写本の本文及び各種書入、鶴舞中央図書館蔵河村文庫乱版本の朱書入、早稲田大学中央図書館蔵乱版本の種村宗八書入等を検討することにより、『源平盛衰記』の古写本、即ち中世に遡る本文を部分的にせよ追究する手掛かりが得られることが判明したため、整版本の本文形成の追究する上で、古態的本文の追跡・分析をも併せて考察することを目的に加えた。

## 3. 研究の方法

本課題研究者は、既に『源平盛衰記』の各種整版本の所在及び基礎的な書誌の確認を行って来た。その基礎情報に基づき、全国各地の研究機関の蔵書目録等により伝存本の情報を収集し、近世初期から明治初期にかけての未調査の整版本の綿密な調査・分析を行い、整版本本文の成立と変容の様態を明らかにした上で、中世から近代に至るまで、「源平盛衰記」の書名を冠する各種書籍が、いかなる本文内容を備えた作品として流布し、日本人の歴史観形成に関わったかを追究する。

## 4. 研究成果

本課題研究における2018年度・2019年度の閲覧調査、研究・検討会は、研究協力者の松尾葦江氏・高木浩明氏・山本岳史氏の3名と共に進めたが、2020年度、及び課題研究延長期間の2021年度・2022年度は研究代表者岩城賢太郎の単独で行った。各年度に行った研究成果を、以下に年度毎にまとめる。

### (1)2018年度

2018年度の研究実績は以下の2点である。

『源平盛衰記』古活字版成立に関する調査研究については、まず、鶴舞中央図書館蔵河村文庫蔵乱版(各冊により構成状況は異なるが、古活字版と整版とが取り合わせされた珍しい版行形態である近世前期『源平盛衰記』)の閲覧調査を行い、全冊全丁のデジタルカメラによる撮影を行った。河村文庫乱版本には、河村秀根・益根父子等による朱の書入れ等が随所にあり、慶長古活字版との校合以外に、「古写本」等との本文の校合・校異・注記等、多くの情報が得られることが閲覧調査により判明した。慶長古活字版 元和寛永古活字版 漢字片仮名交本文(古活字・整版)の具体的な本文形成の考察・追跡に加え、カラー撮影資料をもとに行った書入れ等の分析から、古写本の本文を追跡する手掛かりを多数得た。

また、石川武美記念図書館成篁堂文庫の乱版25冊本と24冊本の2点の閲覧調査を行った。これら計3点の資料は、川瀬一馬氏『新修成篁堂文庫善本書目』に寛永期の版行本であることが報告されていたが、従来の研究ではほとんど参照されておらず、乱版であることも確認されていなかった。しかも25冊本は、整版丁の摺刷状況が極めて良くごく初期のものと思われる。誤って『太平記』の整版丁が1丁綴じ込まれている、他の乱版とは版を異にする整版丁が綴じ込まれている、等の特徴も見出され(研究協力者高木浩明氏が別途、研究成果を報告・公開済)乱版の作成や出版の背景を考察する上で極めて重要な資料であることが確認された。

『源平盛衰記』無刊記整版諸本の成立をめぐる調査研究は、2018年度夏に池田光政筆の『盛衰記歌』という『源平盛衰記』所収歌の抜書という新出資料の蒐集があった。『源平盛衰記』の抜書資料は近世後期に至るまで続けられていたが、所収歌の抜書資料はほとんど例がなく、近世期前期における大名家での『源平盛衰記』受容やその本文の検討を進め、まずは解題を付して本

文の翻刻を行った。

(2)2019 年度

2019 年度的主要研究実績は以下の 2 点である。

『源平盛衰記』写本諸本の閲覧調査として、『源平盛衰記』の中世写本とされる石川武美記念図書館成篁堂文庫蔵写本の閲覧調査を研究協力者と共に複数回に渡り進め、同本全冊の主要な書入、校異、書写情報等に関する特徴や問題点を確認した。調査の過程で、名古屋市図書館鶴舞中央図書館河村文庫蔵『源平盛衰記』乱版が「古写本」とする朱の書入が、多く成篁堂文庫蔵本と共通していることも判明した。その後の静嘉堂文庫蔵写本の閲覧調査を経て、『源平盛衰記』写本諸本の本文は、各本の書写の姿勢等にも十分に留意した上で、特に一本に原態を辿れる状況にはなく、古活字版、乱版、整版の各種本文等も参照しつつ検討すべきものであることを確認した。

研究集会「源平盛衰記の出版と流布」を、2020 年 2 月 23 日(日)11:00~17:30 法政大学市ヶ谷キャンパスポアソナード・タワー-25 階会議室 B にて当研究課題の中間成果報告を兼ね公開の研究集会を開催した。出席者は全国の軍記物語研究、近世出版、書誌学の研究者等約 50 名で、研究報告に続き活発な質疑応答があった。主要なプログラムは以下の通り。

岩城の共同研究の趣旨説明

報告 1 山本岳史氏：源平盛衰記の「語彙」について

報告 2 松尾葦江氏：古活字版の前と後 源平盛衰記の場合

報告 3 高木浩明氏：『源平盛衰記』無刊記整版の「版」を考える

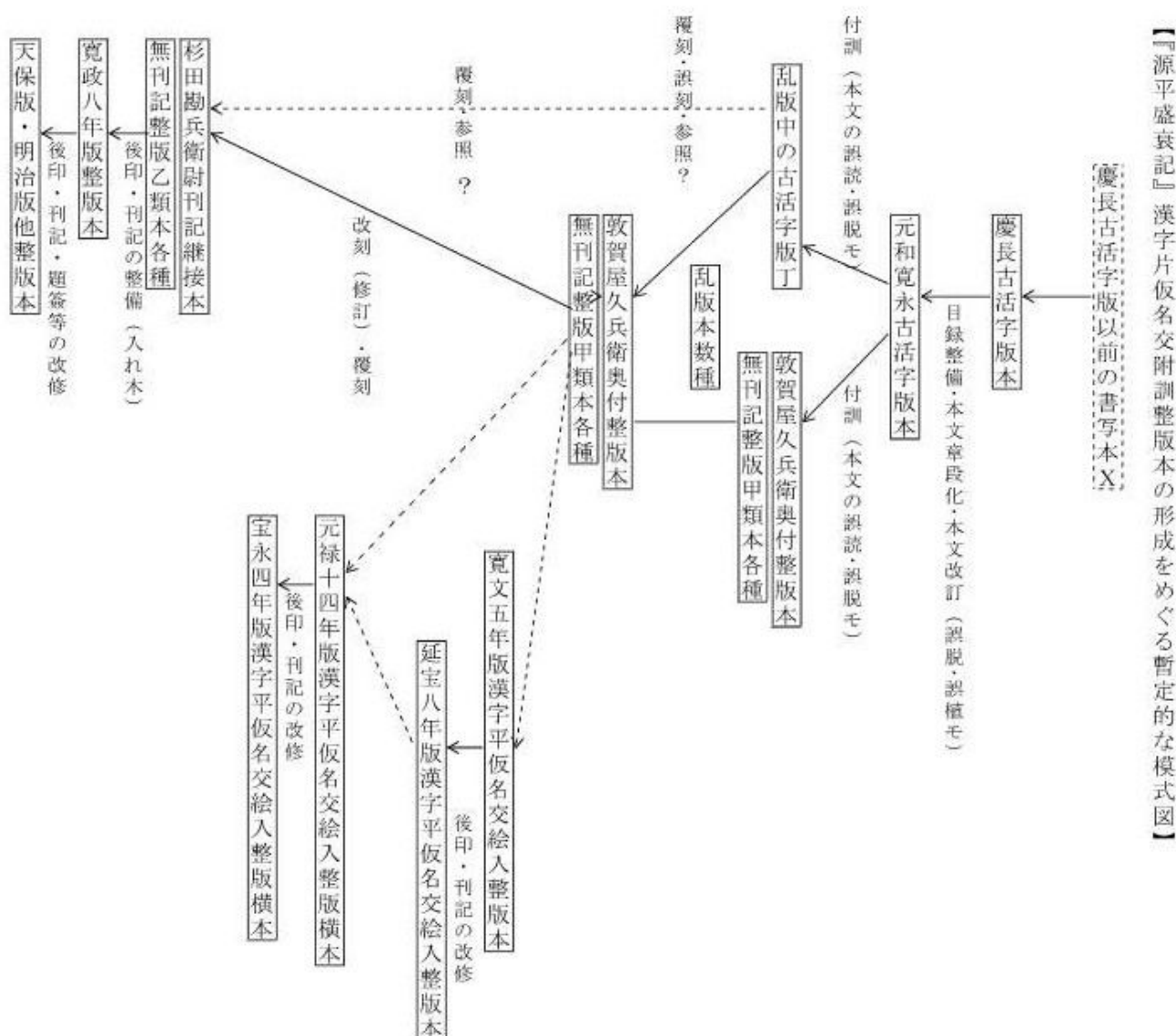
報告 4 岩城：『源平盛衰記』漢字片仮名交附訓整版本の成立を探る 古活字版と整版の関係

コメント：小秋元段氏

全体討議・質疑応答（司会：小秋元段氏）

併せて会場で本課題研究の調査資料として収集した資料をはじめ各種資料等の小展覧を行った（無刊記整版源平盛衰記数種・元和寛永版源平盛衰記(巻 31・32)・乱版太平記(巻 33・34) 乱版源平盛衰記(巻 17・18)・盛衰記歌(池田光政筆)・元和寛永版源平盛衰記 3 冊(法政大学文学部蔵)他)

岩城の報告発表において、以下の模式図を提示した。



本『源平盛衰記』漢字片仮名交附訓整版本の形成をめぐる暫定的な模式図」は、2020年度以降に閲覧調査、及び蒐集した『源平盛衰記』漢字片仮名交附訓整版本関連資料により、細部には再検討を要する箇所もあるとは考えているものの、全48巻本文を備える『源平盛衰記』各次の版行本総体を示す模式図としては妥当なものと考えている。漢字片仮名交附訓整版本の本文形成の始原としては、元和寛永古活字版から形成されたと見られる敦賀屋久兵衛奥付整版本の本文を基準として考えるのが妥当である。但しほぼ同時並行的に、複数の書肆等がそれぞれに関与して乱版本が版行されたことが想定されるため、乱版本については、その中の整版丁については、敦賀屋久兵衛奥付整版本と同じと見て差し支えないものの、古活字版丁については、併せてその本文を確認し、整版丁と古活字版丁との比較検討が必要である。なお、本研究で閲覧調査を行った乱版本の大半は、現状では、整版本との取り合わせ本、或いは原表紙とは確認出来ない改装本であり、全48巻25冊の揃本として版行されたと認定し得る本はごく限られる。

### (3)2020年度

2020年度的主要な研究実績は以下の3点である。

2019年度までに研究力者と共に進めた閲覧調査の確認と検証をし、本課題研究者が2019年度の研究会や研究集会で行った口頭発表の一部を、論文「成簀堂文庫蔵写本『源平盛衰記』所載歌本文小考 巻第四十八所収志賀寺上人説話をめぐって」にまとめた(課題研究者所属の研究機関刊行紀要、及び機関リポジトリにて公開)。石川武美記念図書館成簀堂文庫蔵『源平盛衰記』写本(以下、成簀堂文庫本)の本文とそこに見える種々の書き入れの内、巻第48後半に見える和歌に関する書き入れをめぐって、古活字本・乱版・整版本の本文、及び写本の蓬左文庫蔵写本の本文(本文と書写形態及び異文注記)との比較検討を行い、成簀堂文庫本が、諸本の載せない和歌一首を加えた贈答歌を収めるかたちの本文となっている点が、『源平盛衰記』の本来の本文と言えるのか、或いは本文の古態性を窺わせるものであるのかを考察し、成簀堂文庫本の本文と和歌に関する書写形態の特徴、問題点について指摘した。関連する贈答歌本文を載せる『太平記』が天正期写本に限られることから、当該本文や書き入れが、先覚が指摘する校合に関する弘治二年(1556)にまで遡るものであるかに疑義を示しつつも、現在のところ、成簀堂文庫本が『源平盛衰記』の本来の本文や古態の本文を追究、検証するための有力な資料である点は疑いないものと結論した。

本課題研究の一部の研究成果に基づき、文楽『源平布引滝』『矢橋の段・竹生島遊覧の段・九郎助住家の段』上演に際し、小論「義仲の”命の親”実盛」を執筆し、近世演劇における『源平盛衰記』の受容とその展開が著しい例を示した。(『第160回文楽公演 令和2年10・11月 国立文楽劇場』公演解説書6-7ページに掲載)

口頭発表としては、『平家物語』建礼門院六道語りの本文に引かれる物語歌について」の報告をオンラインの研究会で行った。『源平盛衰記』はじめ、読み本系『平家物語』諸本の建礼門院徳子の六道語りに関する本文に、『源氏物語』『狭衣物語』に触れる本文が見えるが、その異質性と問題点を指摘、検証したものである。

### (4)2021年度

2021年度の研究活動として唯一特記すべきは、早稲田大学中央図書館蔵『源平盛衰記』目録及び巻第1-48・全25冊(請求記号RI05-05356)の閲覧調査を、2021年9月17日(金)及び9月24日(金)の2日間にわたり行ったことである。『源平盛衰記』の本文は、中世に遡ることが出来る資料が稀であり、かつて黒川本と称された室町期の寄合書の『源平盛衰記』全巻にわたる写本が残されていたが、関東大震災により焼失した。その黒川本を大正末期に種村宗八が閲覧調査し、近世期の無刊記整版本『源平盛衰記』に黒・朱・藍等のインクで校合を書き入れたものが、早稲田大学中央図書館蔵本である。岡田三津子氏の研究(『源平盛衰記の基礎的研究』2005年、和泉書院刊)等により、従来から同本の存在は知られていたが、閲覧調査を行った例は、岡田氏をはじめごく限られ、その本文研究は軍記物語研究一般にあまり共有、還元されているとは言えない状況であった。本快打研究で、調査に際し撮影・電子データ化を依頼したデータは早稲田大学中央図書館に寄贈し、下記の早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」サイトで2022年3月末より公開されている。

[https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ri05/ri05\\_05356/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ri05/ri05_05356/index.html)

黒川本の本文に関する資料が、ひろく一般に閲覧出来る状況になったことは、今後の『源平盛衰記』本文研究にも資するところが大きいと思われるが、閲覧調査を行った結果、当該本は、全巻が整版本であるわけではなく、古活字版の丁を多数含む、従来知られている『源平盛衰記』乱版の本とも異なる構成を有する特異な本であることが分かった。早稲田大学本のこうした特色は、電子上に公開された画像では判別が付きにくく、摺刷の状態について閲覧調査を通して確認しなくては判別できないため、調査報告を紀要にまとめる予定であったが、年度内には成果の分析、とりまとめが叶わなかった。(2021年度及び2020年度は、コロナ禍の影響、及び課題研究開始時には想定していなかった勤務校の業務負担があり、閲覧調査や研究活動の変更を余儀なくされた)

### (5)2022年度

2022年度的主要な研究実績は以下の2点である。

2023年3月刊行の論文で書誌情報を報告した無刊記整版本『源平盛衰記』は、全25冊が唐草文様空押し丹表紙を有し、本文の摺刷状態から見て、寛永・正保頃版行と推定される敦賀屋久兵衛奥付本と同時期のものであるが、全冊の前表紙及び後表紙の表皮下に、元和寛永古活字版の反古が半丁ずつ挟み込まれている。調査の結果、当該の古活字版反古は、特定の巻や冊次が集中して用いられており、その古活字版丁には重複がない。従って摺刷の作業上で生じた刷反古の転用ではなからう。当該本の版行の事情や経緯は分からないが、課題研究者は従前より、無訓漢字片仮名交じり本の古活字版から、付訓漢字片仮名交じり本の整版に近い環境にあり、その製作もさほど時期を置かずになされたと推測していたが、その推測を補強する資料である。次の課題は、付訓漢字片仮名交じり本でありながら、整版と古活字版とが混在する『源平盛衰記』乱版である。付訓を含め本文がいかに生成されたのか追究する必要がある。

研究上の本文の妥当性の問題等は別としても、『源平盛衰記』流布本の本文形成において、また近世から現代に至る『源平盛衰記』本文の受容において、根幹となる本文を提供したのは、やはり元和寛永古活字版である。『源平盛衰記』の本文や語彙を検討するに当たっては、慶長古活字版の本文に拠るのみでは十分でなく、あわせて元和寛永古活字版、乱版、無刊記整版の本文をも確認、比較する必要がある。

2022年度の学会発表として、シンポジウム「日本文学の内なる翻案 王朝物語の変容と転生」(令和4年6月11日、大妻女子大学・オンライン併行開催)における、パネリストとしての報告発表「『伊勢物語』と謡曲 中世における業平の形象とその展開」を掲げておく。当該の発表は『源平盛衰記』に直接関わる発表ではないが、2020年度の研究成果における、『源平盛衰記』巻第48所収説話における『伊勢物語』『源氏物語』受容の様相から関連や問題を見出したことが契機となったためである。

本課題研究を開始した際には、以下の3点を重点課題として設定していた。

『源平盛衰記』古活字版成立に関する調査研究

『源平盛衰記』無刊記整版諸本の成立をめぐる調査研究

近世後期から近代前期にかけての「源平盛衰記」受容の検討

については、元和寛永古活字版との関わりにおいて、及び乱版中の古活字版丁への注目において、一定の研究成果があったものと考えている。また についても、従来、確認されていなかった無刊記整版本関連資料を閲覧調査及び資料蒐集することで、『源平盛衰記』整版本についての多角的かつ総合的な研究が進められたものと考えている。但し、何れにしても本課題研究期間終了までには、概説的な論考をまとめるに止まってしまった感がある。『源平盛衰記』は、全48巻の長大な本文内容を有するが、その享受の諸相を更に追求して行くためには、限られた紙数の論考ではなく、閲覧調査を行った際に確認された書入等の全ての情報をまとめた調査報告書等にまとめておく必要がある。本課題研究期間は終了したものの、出来るだけ早期に、鶴舞中央図書館蔵河村文庫乱版本の朱書入を全て列記し、併せて、石川武美記念図書館成篁堂文庫写本の本文及び各種書入、早稲田大学中央図書館蔵乱版本の種村宗八による黒川本の書入と比較検討し、分析結果や考察をまとめ公開して行きたい。

なお については、上記の各年度の研究成果には記していないが、近代期のものを中心に、「源平盛衰記」を名乗る書籍や刷り物等の蒐集を進め、中には従来、ほとんど参照されていない資料も蒐集したが、その調査や分析が十分でなく、研究成果として公開出来ていないものが幾つもある。これらの資料についても今後、研究ノートや短い論考等のかたちで報告して行きたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 岩城賢太郎	4. 巻 第9号
2. 論文標題 成實堂文庫蔵写本『源平盛衰記』所載歌本文小考 卷第四十八所収志賀寺上人説話をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 武蔵野大学日本文学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岩城賢太郎	4. 巻 67
2. 論文標題 鎌田正清夫婦の最期を伝えた中世・近世の文芸 舞曲・謡曲・浄瑠璃・絵解	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 武蔵野文学（武蔵野書院2020年度版図書目録）	6. 最初と最後の頁 34-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩城賢太郎	4. 巻 9
2. 論文標題 池田光政筆『盛衰記歌』翻刻と解題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 武蔵野文学館紀要	6. 最初と最後の頁 125-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岩城賢太郎	4. 巻 13
2. 論文標題 『源平盛衰記』における古活字版と整版と 表紙裏古活字版反古無刊記整版本の調査報告を手掛かりに	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 武蔵野文学館紀要	6. 最初と最後の頁 39-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岩城賢太郎	4. 巻 160
2. 論文標題 義仲の ” 命の親 ” 実盛	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『第160回文楽公演 令和2年10・11月 国立文楽劇場』公演解説書	6. 最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 岩城賢太郎
2. 発表標題 『平家物語』建礼門院六道語りの本文に引かれる物語歌について
3. 学会等名 2020年度中世王朝物語研究会 (2021年3月27・28日オンライン開催)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩城賢太郎
2. 発表標題 『源平盛衰記』流布本本文成立に関する調査研究の中間報告 元和寛永版と乱版の本文に注目して
3. 学会等名 軍記・語り物研究会 第423回例会 (2019年秋例会) 11月24日於法政大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩城賢太郎
2. 発表標題 尾張知多郡における長田・鎌田一族の最期をめぐる芸能 幸若舞・浄瑠璃・絵解き
3. 学会等名 さんごの会 (第3次) 第10回例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩城賢太郎
2. 発表標題 池田光政筆『盛衰記歌』について 近世前期に流布した『源平盛衰記』本文の検討から
3. 学会等名 さんごの会(第3次)第15回例会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>科研費による研究会「源平盛衰記の出版と流布」の開催 (開催概要) 開催日: 2020年2月23日(日) 会 場: 法政大学 市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー25階会議室B 受 付: 10:45~ 参加無料・事前申込不要、一般来場歓迎 会場で源平盛衰記に関連する各種資料等の小展覧を実施 無刊記整版源平盛衰記数種・元和寛永版源平盛衰記(巻31・32)・乱版太平記(巻33・34) 乱版源平盛衰記(巻17・18)・盛衰記歌(池田光政筆)・浮世絵・近代洋装本等、他 研究会プログラム 11:00 岩城賢太郎 共同研究「『源平盛衰記』の出版と流布に関する研究 日本人の歴史観形成の一階梯」趣旨説明 11:10 報告 山本岳史氏 源平盛衰記の「語彙」について 11:50 報告 松尾葦江氏 古活字版の前と後 源平盛衰記の場合 12:30 (昼食休憩・資料展覧) 13:50 報告 高木浩明氏 『源平盛衰記』無刊記整版の「版」を考える 14:30 報告 岩城賢太郎 『源平盛衰記』漢字片仮名交附訓整版本の成立を探る 古活字版と整版の関係 15:10 (休憩・質問用紙回収) 15:30 コメンテーター 小秋元段氏(法政大学教授) 15:50 全体討議・質疑応答 司会: 小秋元段氏 (17:00過ぎ終会)</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	松尾 葦江  (Matsuo Ashie)		
研究協力者	高木 浩明  (Takagi Hiroaki)		
研究協力者	山本 岳史  (Yamamoto Takeshi)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究会



〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------